

タイの縫製業と移民労働者

矢倉 研二郎

●はじめに

こんにちのタイ経済の課題は、「中進国の罫」、すなわち、経済の発展が所得段階で停滞してしまいう状況の回避である。端的には、低賃金労働力に依存し生産性の低い労働集約的な産業を中心とする産業構造から、より資本集約的で高度な技術を要する産業を主体とする産業構造への変化、つまりは産業の「高度化」が求められている。

ただし個々の産業や企業レベルでは必ずしもそれに沿った変革が円滑に進んでいるわけではない。少子化の進行やタイ人労働者のいわゆる三K労働の忌避にも起因する「人手不足」を背景として、タイの労働集約的な産業においては、「高度化」ではなく、カンボジア、ラオス、ミャンマーという隣国からの移民労働者を雇用することで

生き残りが図られてきた。縫製業もそうした産業のひとつである。

以下、タイの縫製業における移民労働者への依存の深化の背景を概観するとともに、移民労働者への依存と産業の高度化との両立可能性について考察したい。

●タイの縫製業の近況

縫製業はタイの製造業のなかで重要な位置を占めてきたが、過去二〇年あまりの間にその製造業に占める比率は徐々に低下し、二〇〇六年頃を境に産業の規模も縮小しつつある(図1)。また、タイの縫製製品の多くは外国へ輸出されているが、過去一〇年余りは輸出額も停滞している。その間にベトナムやカンボジアといった近隣諸国で縫製業が急拡大し、輸出額においてタイはそれら二国に追いつき越えられその差は拡大の一途をたど

っている(図2)。これら近隣諸国での縫製業の発展はその賃金水準の低さに負うところが大きい。作業の機械化が困難で人手を多く要する縫製業では、労働者の賃金の低さが競争力を大きく左右する。

それゆえ、タイの縫製業が国際市場で生き残るには、より付加価値の高い製品の生産へ比重を移すといった高度化が求められる。しかし、タイの縫製製品の輸出単価は伸びてはならず、高度化という点でも停滞しているようにみえる。

●縫製業の高度化

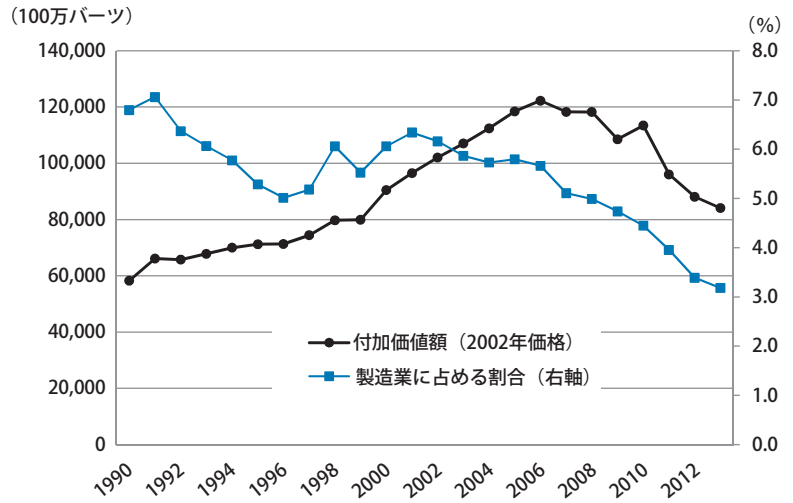
ここで個々の産業や企業における高度化とは何を指すのかについて整理しておきたい。高度化とは、獲得できる付加価値を増大させるような産業全体としての変化、あるいは個々の企業の事業の変化を指すといえる。そして既存の研究

は、高度化を「生産面」「製品面」そして「機能面」の三側面に大別している。生産面での高度化とは、生産工程ないしは生産技術の改善による生産効率や品質の向上で表される。製品の付加価値を高めることが製品面での高度化である。機能面の高度化は、ひとつの産業を製品の企画から小売り段階に至る間に組み込まれた多数の機能の連なりと見立て、より高い付加価値の得られる機能を担うようになることを指す。

縫製業の場合、とくに機能面での高度化という観点から、企業の事業タイプをCMT、OEM、ODM、OBMの四つに分類することが一般的である。CMTは、アパレル小売り企業や商社といったバイヤーからの注文を受け、バイヤー側が用意した原材料を用いて衣料品を受託製造する事業を指す。OEMでは、発注者の仕様に沿って製品を製造するが、原材料は製造業者自らが調達する。ODMになると製品のデザインも行う。そしてOBMでは自社ブランドの製品の生産・販売まで手掛ける。

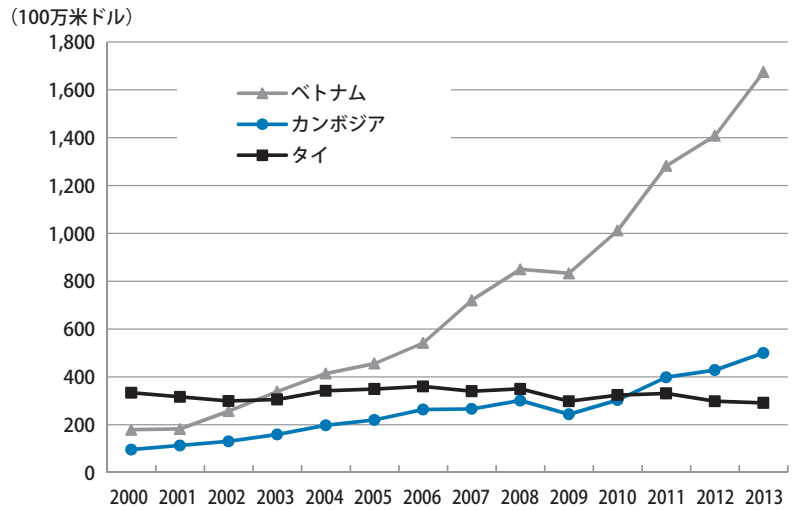
縫製業に関する研究においては、この枠組みに沿って、CMTからOEM、ODM、OBMへと事業

図1 タイにおける縫製業の付加価値額



(出所) Office of National Economic and Social Development Board, National Accounts of Thailand, 2013 (<http://eng.nesdb.go.th/Default.aspx?tabid=94>) より作成。

図2 縫製製品輸出額 (HSコード61・62類)



(出所) UN Comtrade データベース (<http://comtrade.un.org/>) より作成。

タイプを変化させていくことが機能面の高度化ととらえられている。

●タイ縫製業における高度化

タイの縫製企業の多くは地場企業であり、外資系企業の割合が高いベトナムやカンボジアとは対照的である。しかし機能面での高度化という点では、CMT中心のベトナムやカンボジアに対しタイの縫製企業にはOEMが多く、さら

にODMやOBMを担う企業も少なくないとみられる。しかし、先にもみたような生産や輸出の減少傾向からすれば、タイの縫製業が変革を迫られていることは明らかである。

タイの縫製業界もそのことを強く認識し、策を講じてきた。たとえば、タイ縫製業協会やその姉妹組織は会員企業向けに生産技術や製品開発面でのサポートを行って

きており、生産面や製品面の高度化を追求していることが窺える。さらに機能面での高度化も模索されている。たとえば、筆者が二〇一四年にインタビューを行ったタイ縫製業協会幹部によれば、タイを「ファッション・ハブ」にすることを目指しているという。すなわち、生産拠点は低賃金の近隣諸国へと移していき、タイ国内の拠点は企画やマーケティング等の本社機能を担う、ということである。

●タイ縫製業における移民労働者

他方で、こうした高度化が求められるようになった時期に広がってきたのは、移民労働者、とくにミャンマー人労働者の雇用である。タイの縫製企業がミャンマー人を雇用するようになったのは、一九九〇年代の前半のことと考えられている(参考文献①)。もともと縫製工場はバンコクやその郊外に集積していたが、ミャンマー人労働力を活用するべく、多くの工場がミャンマー国境のメーソットにも設立されるようになった。その結果、メーソットの縫製工場ワーカーはミャンマー人で占められているとみられる。さらにここには、バンコクとその周辺の工場でも多くのミャンマー人が働くようになってきている。

ミャンマー人を雇用する最大の理由は、メーソットの工場にとっでは「低賃金」にあると考えられる。かつてはタイの法定最低賃金は地域により異なり、メーソット地域はバンコクやその周辺部よりも最低賃金が低かった。そして最低賃金は法令上は外国人労働者に

対しても適用されるのだが、現実にはミャンマー人に対しては最低賃金に満たない賃金しか支払われないケースが少なくなかったとみられる。そしてそうした状況は、最低賃金が全国一律で一日三〇〇バーツとなって以降も続いている模様である（参考文献②）。

しかし、こんにちバンコクやその周辺に工場をもつ縫製企業についていえば、低賃金ではなく「人手不足」がミャンマー人を雇う直接的な理由となっている。筆者が面会した縫製企業の幹部曰く、タイ人労働者が集まらないのでミャンマー人労働者を雇わざるを得ないのだという。そして確かに、これらの企業ではミャンマー人もタイ人も職種が同じであれば賃金は同じであり、一日三〇〇バーツかそれ以上の額が支払われている。ただし、こうした工場においても、仮にミャンマー人を雇うことができずタイ人だけで十分な人数を確保しなければならぬならば、ある程度の賃上げを行う必要に迫られるであろう。したがって、ミャンマー人を雇用することで賃金を低く抑えることができていたととらえることもできる。

●移民労働者と縫製業の高度化

タイの縫製工場で働くミャンマー人がどれくらいいるのか、確かな規模はわからないが、縫製業協会幹部の話では大部分の工場がミャンマー人を雇用しているということであり、ミャンマー人なしには現在のタイの縫製業は成り立たない状況にあると考えられる。しかし、ミャンマー人への依存は縫製業の高度化にとつてどのような意味を持つのであろうか。

ミャンマー人に限らず、未熟練外国人労働者を雇用することは生産現場にマイナスの影響を及ぼす可能性がある。たとえば、言語の壁ゆえに生産上の指示や訓練に支障が出るかもしれない。外国人の就労期間が法的に制限されている場合には、長期雇用を通じた技能形成が難しくなる。また、職場において差別的に扱われていると感じるような状況があれば、外国人労働者の就労意欲は低下し、さらにはチームワークも困難になるかもしれない。

こうした負の効果がタイの縫製工場に存在するか否かについて、一般化できるほどの情報はまだ得られていないが、筆者が訪問した企業の事例に基づいて若干考察し

たい。

筆者は二〇一四年から二〇一五年にかけてバンコクとその周辺部に立地する縫製企業五社・六工場を訪問した。そのうち三社の三工場でミャンマー人を雇用していた（ちなみにこれら六工場にはミャンマー以外の国から来た移民労働者はいなかった）。これら三工場においてミャンマー人はいずれもワーカーとして働いている。ただしワーカーのなかにはタイ人もおり、生産班はミャンマー人とタイ人の混成となっている。これら企業の幹部曰く、ワーカーレベルの従業員については国籍によって職務は区別していないとのことであった。また、これら三工場とも、職務が同じであれば国籍にかかわらず共通の給与体系と給与水準を適用しており、いずれも一日三〇〇バーツかそれ以上の基本給が支払われている。

タイ人管理職がミャンマー人ワーカーに指示を行う際には通訳を用いるが、タイ語の達者なミャンマー人ワーカーに通訳の役割を担わせることもあるという。ただし、タイでの就労年数の長いワーカーが少なくない模様で、ミャンマー人ワーカーのなかにはタイ語を解

する人も多いとのことであった。ミャンマー人ワーカーの技能や働きぶりについても、これら三社の幹部はとくに問題を感じていない。ミャンマー人の方が残業をいとわれない（むしろ残業手当を稼ぎたいがため、残業が少ないと辞めてしまう）という声も聞かれた。離職率についても、ミャンマー人の方が高いという声は聞かれなかった。

それではこれら三工場における「高度化」の状況はどうであろうか。三社の幹部曰く、ミャンマー人の雇用開始以降もこれらの工場では生産性の向上と不良率の低減を達成してきたという。すなわち、生産面での高度化がある程度実現しているということである。

このわずかな事例をそのままタイの縫製業全体にあてはめることはできないが、これら三工場の例は、少なくともやり方次第ではミャンマー人の雇用と生産面の高度化（そしてそれは製品の高度化にもつながる）との両立は可能であることを示唆している。

何がその成功の鍵なのかについては、筆者自身、現在進行中の研究で明らかにしようとしているところであるが、三工場の事例から

は次のような仮説が浮かび上がる。それは端的には、先に挙げた外国人労働者を雇用することで生じうる負の効果を発現させないような環境ないしは取り組みが意味を持つのではないか、というものである。

たとえば、上記三工場では、ミャンマー人ワーカーの平均的なタイ語能力が比較的高く、言語の壁は相対的に低いという可能性がある。そして高いタイ語能力は、長年にわたるタイでの就労によって培われる。そしてさらにそのことは、同じ工場での長期就労を可能とし、技能形成をも助けることになる。

また、すでに述べたように、上記三工場では労働条件面でミャンマー人とタイ人を区別していない。さらにタイ人従業員に対してミャンマー人を差別的に扱わないように指示しているところもある。こうした平等な扱いは、ミャンマー人の就労意欲の低下を防ぎ、またタイ人とミャンマー人が同じ班で共同作業を行うことを容易にしているのかもしれない。

一方、ミャンマー人を雇用することがタイの縫製業の機能面での高度化、とくに前述のような生産

拠点を近隣諸国へ移してタイ国内は本社機能に専念する、という形で高度化に与える影響については、様々な可能性が考えられる（この点も筆者が参加するグループが取り組んでいる研究課題である）。単純に考えると、ミャンマー人を雇用することによりタイ国内での生産を維持できているとすれば、そのことは生産拠点の海外移転を抑制する方向に作用すると言えそうである。しかしミャンマー人を雇用することが企業の利益増大に貢献しているとすれば、それは対外投資に必要な資金力を高めることになり、海外移転を促進するかもしれない。

生産拠点の海外移転に関連してはさらに興味深い例がある。筆者が訪れたある縫製企業では、タイ国内の工場で働いてきたミャンマー人従業員をミャンマーに設けた子会社の工場の管理職クラスに抜擢しているという。この事例は、タイの縫製工場で技能を高めた移民労働者が帰国することで、彼らの母国へのタイ縫製企業の進出が促進され、さらにはその国の縫製業の発展につながる可能性があることを示している。

●おわりに

以上のように、移民労働者の雇用はタイの縫製業の生き残りの可能性とそのあり方に多大な影響を及ぼしうる。そして同様のことは、移民労働者に依存するタイのその他の産業についてもあてはまるであろう。

今後タイでは少子化により労働人口が縮小していき、他方で隣国での雇用機会不足やタイとの賃金格差はしばらく続くと思われ、需要と供給の双方の要因により移民労働者がさらに増加する可能性は高い。さらに、タイのプラユット政権は、投資優遇措置対象事業（いわゆるBOI事業）に対して禁じてきた未熟練外国人労働者の雇用を二〇一五年一月から解禁している。これは二〇一六年末までの時限措置ではあるが、企業側のニーズの強さをふまえると恒常化する可能性もある。こうした状況下で、縫製業に限らず、タイの広範な産業において移民労働者への依存は今後さらに深まってくるものと予想される。

本稿が紹介した縫製工場の事例のように、製造業における移民労働者への依存は生産面や製品面での高度化を阻害しないかもしれない

い。しかしタイという国全体のレベルで見れば、大量の移民労働者を受け入れることは、労働集約的な産業を延命させ、長期的には国全体の産業構造の高度化を遅らせる可能性もある。このように、移民労働者の受け入れの規模とあり方は、タイが「中進国の罠」から逃れることができるか否かをも大きく左右するという意味で、タイ経済にとって非常に重要な意味を持っている。

（やぐら けんじろう／阪南大学経済学部准教授）

《参考文献》

- ① Arnold, D. and Pickles, J., "Global work, surplus labor, and the precarious economies of the border," *Antipode*, Vol. 43, No. 5, 2011, pp. 1598-1624.
- ② Jaisat, K., Biel, E., Pollock, J., and Press, B., *Migrant workers in Thailand's garment factories*, Amsterdam: Clean Clothes Campaign, 2014.
- ③ Thai Garment Manufacturers Association, *Directory 2013-2014*, Bangkok: Thai Garment Manufacturers Association, 2014.